D 10　女子大生の同居意識(2)ー住生活の志向と同居規定要因についてー

大阪教育大学　岸本幸臣　甲子園短大　○矢沢正子

目的　前編と同様である。

方法　前編と同様である。

結果　(1)同居生活の考え方；同居時における各住生活行為の捉え方をみると、「夕食」を老親と共にとろうとする層が最も多く、共同化志向は約9割に達する。彼女達の約7割は別居志向であるにもかかわらず、同居するなら「食事」を共にしたいとする傾向は興味深い。「だんらん」は共同化志向が約半数に低下し「TV視聴」や「就寝」では各々「趣味の合う者だけで」,「できるだけ親と離れて」等の志向が強くなっている。(2)同居の規定要因；同居を規定する最大要因としては①「親子の相性」②「親の健康」③「子供の収入」が指摘されている。「住宅」を最大規定要因として指摘したものは約1割にすぎない。各要因毎の同居への影響度とみると、「大いに影響する」と回答した率が最も多いのは「住宅の広さ・設備」(約75%)である。即ち親との同居を決める際の最大要因は、親との相性であるとしているものの、具体的な同居生活のレベルでは、住宅という物的条件がきわめて大きい影響を与えると受けとめているとみられる。(3)まとめ；女子短大生は高齢化問題について的はずれでない程度の知識は持っているが、関心の低い問題として受けとめている。従って老人の特性や老親との同居規定要因も、一般的な理解はできているものの、具体性や社会性の視点に欠ける傾向も認められる。潜在的には別居志向が強いが、同居生活における住生活では、「食事」を共同化の重要な行為として位置づけている。この点では3世代同居に対して、各立場でほぼ共通した合意の成立していることが認められた。